

本稿ではこのように多種多様な田舎暮らしの中で、上記のように過疎化に悩む自治体のおこなう移住誘致に着目し、どのような要因で過疎地に移住者が集まるのか、また、定住するにはどのような条件が必要なのかを、過疎化が進むなか 20 年間無料で町有地を貸し出すという山田ふるさと農園事業を行う茨城県大子町をフィールドに移住者からの視点を元に考察した。

農園に移住した 5 組の家庭にヒアリングを行ったところ、当農園に移住を決めた理由はその土地に何かしらの縁がある、または全く知らない土地だが自然環境や食べ物などが気に入ったからという 2 つに分かれた。なお、土地の条件が悪い場合でも、優遇制度や効果的な広告によって十分人が集まることが分かった。また、定住に必要な要点として、地元コミュニティが移住者を受け入れてくれること、移住する際にある程度の不便さや困難は覚悟することが挙げられた。話から浮かび上がった要点として、移住者に必要なのは地元コミュニティへの溶け込みだけでなく、移住者同士のコミュニティを形成することであることが分かった。現在は特に大きな問題は起きていないが、今後、移住者が高齢化した際には、町営バスの巡回など交通の便を改善することが必要になると思われる。

## ドイツにおけるヤノツシュの 作品世界の発信と再発信： キャラクター商品の孕む両義性

小林 夏美

ヤノツシュはドイツで非常に有名な子どもの本作家である。彼は多くの作品で絵と文どちらも手がけているが、その作品はキャラクター商品としても非常に広まりをみせている。本稿は、ドイツ

におけるヤノツシュの作品世界の発信と再発信という現象の一部を明らかにし、その考察を行うものである。

ヤノツシュが子どもの本として発信している作品世界には、ディートリヒ（1992）によれば、現実世界の解釈としての第一の世界と「魔法のしるし」によって示される第二の世界、第一の世界から第二の世界へと離脱する「奇人」たちが描かれている。第一の世界として描かれるのは、小さき者と大きな者との間の根源的対立が自然法則という覆し得ないものとして存在し、また多くの者が誤った幸福像を追い求めて真の幸福に気づいていない世界である。それに対し第二の世界は、「魔法のしるし」に満ちたより「真の」世界として描かれる。その世界においては、人々は自身の内に静けさを見出し、自然や宇宙と自我との一致をみることができるのである。第二の世界に到達するためには第一の世界という社会を「降りる」ことが必要であり、それを実行した者が「奇人」たちである。ディートリヒ（1992）は「奇人」たちの目指すものとしてヤノツシュが描く最終目的を、第二の世界へ到達し自然や宇宙との一致をみることでありと捉えるが、「奇人」たちの示す姿はそれに止まるものではない。「奇人」たちは社会から一度「降り」て第二の世界に到達した上で、第一の世界とのかかわりを模索する、両者のあわいを生きる存在として描かれているのである。

ヤノツシュは作品世界を段階的に捉え、個々の作品を個々の段階へ向けたものとして描いている。ほぼパナマ・シリーズの段階のみを「ヤノツシュ」として再発信するキャラクター商品はヤノツシュの作品世界を一部に限定している。しかし同時に、本に親しみのない子どもたちにも作品世界をひらくというはたらきも担っている。ここに、キャラクター商品の孕む両義性をみることができる。